

「児童文化」から学ぶ領域「言葉」

— 乳幼児期を豊かに生きるための「言葉」と身近な人とのかかわりを考える —

“Words” learned from “Children’s Culture”

— Consideration about the relationship to live a rich Infancy through words and people close to you —

石 堂 美紀代*

(令和4年7月25日受理)

要約

幼稚園や保育所等の教育・保育内容は多岐にわたる上、小学校へ円滑につながることも必要とされていて、保育者にとってすべき役割が大きい。また、保護者も少子化や核家族化等により、子育て困難な時代に生きている。その中で「言葉」は、保護者を含めた身近な人との関わりを通してだんだんと獲得されていくものである。本研究は、保育者を目指すものが学ぶべき「言葉」の大切さ、その表現の元になる豊かな体験のあり方、保護者支援の様子などを「児童文化」の授業や、筆者の勤務する子育て支援施設での親子の様子などから考える。

キーワード：遊びと言葉の育ち、子育て支援、保育者養成

keywords：Play and language growth, Child care support, Child care worker training

1. はじめに

(1) 乳幼児期の豊かな言葉の発達を見据える

「幼稚園教育要領」「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」¹⁾は、①健康な心と体、②自立心、③協同性、④道徳性・規範意識の芽生え、⑤社会生活との関わり、⑥思考力の芽生え、⑦自然との関わり・生命尊重、⑧数量や図形・標識や文字などへの関心・感覚、⑨言葉による伝え合い、⑩豊かな感性と表現としている。

また、「幼稚園教育要領解説」の中には、言葉に対する豊かな感覚を獲得する具体的な内容が示されている²⁾。

・言葉は身近な人に親しみをもって接し、自分の感情や意志などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して、次第に獲得されていくものであることを考慮して、幼児が教師や他の幼児と関わることにより心を動かされるような体験をし、言葉を交わす喜びを味わえるようにすること。

- ・幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師や他の幼児などの話を興味を持って注意して聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること。
- ・絵本や物語などで、その内容と自分の経験を結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。
- ・幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。
- ・幼児が日常生活の中で、文字などを使いながら思ったことや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わい、文字に対する興味や関心をもつようにすること。

(*いしどうみきよ 非常勤講師 幼児教育学・保育学)

(2) 研究目的

現在、若者たち（保育者を目指す者も含め）はもちろん、乳幼児の保護者も、決して豊かな言葉の表現をしているとは言い難い。メールの文章に際しても「了解しました」→「りょ！」など短縮言葉も非常に多く使用している。子どもも、うれしいことや、困ったこと、びっくりしたことをすべて「やばい」の一言で表現している。「言葉」は、自分の気持ちを伝えたり、相手の話すことに耳を傾け、共感したり、喜びあったりと、コミュニケーションのツールであると同時に、「生きていくための力」でもある。この「言葉」による伝え合いなどを楽しむようになるためには、保育者が気軽に友達と言葉を交わすことができる雰囲気や関係を作り、伝えたいような体験をさせ、遊びと一緒に進めるための必要性を乳幼児に感じさせていくことが大切である。しかし、現在の子どもたちは、自然との出会いや仲間との遊び、季節の行事や伝承遊びなど、地域や家庭での経験も不足している。そこで保育者を目指す者は前記(1)の乳幼児期の豊かな「言葉」の発達を見据えながら、どのように学び、どのような思いをもち、どのように行動すればよいのかを「児童文化」の授業や、K市子育て支援施設の取り組みやそこに集う保護者の思いを探り、子育て支援事業にも参加することから考えていきたい。

2. 「児童文化」の役割と効果

(1) 「児童文化」として学ぶ内容は、絵本・紙芝居・わらべ歌・手遊び・手作りおもちゃ・折り紙・人形劇・パネルシアター・エプロンシアター・ペープサート・ゲーム・伝承文化・年中行事等、保育実践に必要なものをほぼ網羅している。しかし、学生たちに第1回目授業で「児童文化とはどんなことを学ぶと思うか」と質問してみると・

表1

児童文化とはどんなことを学ぶと思うか	人数
「児童文化」って聞いたことがない	2人
子どもの歴史、保育の歴史、昔から現代に至るまでの子どもを取り巻く環境や、保育の場がどのように変化したかを学ぶ堅苦しいもの。	5人
文化センター、児童館、遊園地など子どもに関わる施設について学ぶ。	3人
コマ回しやメンコ等の昔遊びや、駄菓子屋、近所の公園で紙芝居を見るなど、子供のたまり場について学ぶ	2人
「わからない」あるいは「間違ったことを想像していた」	48人

学生にとって、なじみのない言葉でとっつきにくいものだった。しかし、学んでいくうちに保育に欠かせないものであり、自分自身が子どもの頃から親しんできたものであり、他の教科で学んだものもありと、身近で具体的で、楽しいものだと理解するようになってきた。

(2) 児童文化の現状

子供を取り巻く環境の変化

かつて自然に囲まれ、他者の多様なまなざしに触れ、それらの様々な関わりに対して、自らも応答し、成長していったが、関係性が希薄になってしまった。自然と触れ合う集団遊びから室内遊びへの変化は子どもたちに自然とのふれあいの減少や、他者とのさまざまな関わりの減少を加速させている。三つの減少（遊び場の減少、子どもの減少、安全性の減少）が室内遊びの増加の原因とも言えるが、それに伴い、室内用のおもちゃやゲームの普及が目覚ましい。

子どもの想像力の入り込む余地がないほど、忠実に再現したおもちゃや豪華なおもちゃ、勝ち負けを競い合う興奮と緊張の連続のゲームなど聴覚と聴覚に特化した遊びが増加している。このようにバーチャルな体験ばかりの生きた体験が乏しい現代においては子どもの五感に触れるような身体性の伴う遊びの創造や児童文化財の導入の仕方を考えるべきである。また、じっくり考えたり、工

夫したり、感動するような遊びの創造や想像が必要となる。

- (3) 学生が自分が子どもの頃に遊んだ遊びと今の子どもたちが遊んでいる遊びを比較した
- ・学生が子どもの頃に遊んだ遊び（2005年から2010年頃）

表2

	室内遊び	室外遊び
主に一人遊び	ブロック・粘土・着せ替え人形・お絵描き・ビデオ	なわとび 一輪車 竹馬 大型遊具
多人数	ままごと 絵本・紙芝居 木の積み木 プリキュアごっこ お寺の和尚さん あやとり	どろけい・こおり鬼 かくれんぼ・砂場 泥だんご・虫取り シャボン玉 色水遊び・近所の小さな公園で遊ぶ

- ・今の子どもがよく遊んでる遊び（2022年頃）

表3

	室内遊び	室外遊び
主に一人遊び	DS、スイッチなどのゲーム トミカ 人形ごっこ ティックトック YouTube レゴ パズル 折り紙 お稽古事	キックバイク 大型遊具 大きな公園へ家族で行く
多人数	ままごと 木の積み木 船体ヒーローごっこ カードゲーム トランプ しっぽとり	砂場遊び 鬼ごっこ

学生の考察（表2と表3の比較）

- ・子どもの頃、石や葉っぱを食材や食器に見立てて、ままごと遊びをしていたが、今はとても繊細でリアルなものでままごとをしている。
- ・今のリアルなままごとセットは物の名前を覚えるのにはいいかもしれないが、友達と「おいし

いね」「ちょっと面白い形ですけど卵焼きですよ」などと言いながら食べる真似をしたり、想像を膨らませるのは、成長につながると思う。

- ・自然の中で遊ぶことが少なくなっている。
- ・「知育の日」と称して、ある保育園では椅子に座り机に向かって、レゴやパズルを必死でしているのを見て驚いた。
- ・ゲーム機で遊ぶことが増加している。赤ちゃんが泣いたり、料理など用事をする時、YouTubeを見せると答えた母親が結構いた。
- ・近所の公園で友達と遊んだり、家族で散歩に行ったり、ボール遊びやかけっこをしたりしていた。今は遠くの大きな施設の整った公園へ車で行き、子どもだけで遊んでいるらしい。親子で一緒に遊ぶことが必要だと思う。
- ・外遊びが少なくなっている。保護者に外遊びの大切さを伝えるとともに、家での外遊びが減少していることを踏まえ、保育施設では増やしていく。

(4) これからの児童文化と保育者について

子どもにとって、いかに時代が変わり社会状況が変化しようとも、遊びは何といても面白いものである。自然の中での遊びや視覚・聴覚だけに突出しない五感すべてを働かせる遊びなどの面白さを子どもに伝えないといけぬ。大人が遊びをどうとらえ、どのようにかかわることが望ましいのか、その上で子どもたちの望ましい発達についての遊びの内容や技術について考え、伝承、再生、再発見を行っていくことが求められる。そのために保育者の存在は大きい。現代の保育者や保護者は自然を相手に遊べなくなっていたり、遊びをあまり知らなかったり、感動体験が少なく、それを豊かな言語表現しにくかったりする世代と言われている。幸いに前記表2、表3を見ると、当学生は豊かな体験をしている。また保育者を目指す学生として、今のままでは問題であるとの認識ももっている。学生は児童文化財を実際に使って、子どもたちと遊ぶ体験をどんどんすべきである。「実習」などだけではなく、様々な場面をとらえてやってみることや、遊びを知らない世代である保

護者にも将来遊びを伝えることの必要性を認識しながら、実践することが大切である。

(5) 「児童文化」の効果

表4 遊びの中での「児童文化」の効果³⁾

①環境との出会いが促進される効果
保育においては物(玩具、遊具、道具、素材)人、自然、情報など、多くの環境との出会いが子どもの成長に作用します。例えば、発達に合わせた玩具の種類や素材、配置、遊びのコーナー、遊ぶ場、自然など周囲の環境やそれらの環境の構成について考え、どのように配慮するか(間接的な援助)は特に重要です。また、遊ぶ仲間、見守る大人など関わる人、触れる機会や関わる時間などについての配慮も必要となります。
②つくる・表現する意欲をたかめる効果
描画や製作などを通して子どもはさまざまなものを作り表現します。表現する力は、自分のイメージや経験したことに絵を表現したり、廃材などを使って自由に製作をしたりするなかで育っていきます。さらに、童謡、リズム遊び、舞踏などさまざまな活動を通して多様な表現の方法を身に着けます。
③人と人の関係をつなぐ効果
保育の場面においては、同年齢・異年齢のたくさん子ども同士の出会いや仲間関係、それを見守る大人が存在があります。また、保護者以外の大人や地域の人との出会いによっても広がっていきます。例えば、地域の高齢者との交流をしたり、地域の人に伝承遊びを教えてもらったり、作物を植えて育てる過程で地域の農家に協力してもらったりすることは、さまざまな人や文化に触れるきっかけとなります。
④言葉を育む効果
パネルシアターやペープサート、紙芝居、手遊びや歌遊び、ストーリーテリングなど観たり聴いたりしながら、さまざまな表現に触れる機会を得ていきます。また、自ら言葉を用いて、演じたり、わらべうたや「鬼さんこちら」のように遊びの中で使われている言葉を知ったりすることも言葉を育むきっかけになります。
⑤心と体を豊かにする効果
保育者の語る話に耳を傾けると、安心し、ゆったりとした気持ちを持つようになります。また、健康な体をつくり、自然や仲間と積極的にかかわりながら遊ぶこと、例えば年上の子どもからどろ団子や色付きの水の作り方を学んだり、遊びのルールや伝承がなされたりすることもあります。

表5 生活の中での「児童文化」の効果⁴⁾

①情緒を安定させ、安心して生活できる効果
児童文化に触れることによって情緒が安定する。あるいは安心して生活する材料となっている面があります。例えば、昼寝をするときなど、保育者が優しく体をさすりながら子守唄を歌って眠りに誘うと、子どもは安心して眠りにつくことができます。また、生命の保持、危険回避のために有効な知識や心得を作品やお話の中から学ぶ機会も多くあります。
②子どもの生きる力を育む効果
例えば、栽培から収穫、調理の過程にかかわることで、自然の恵みや調理する人への感謝の気持ちを持ち、意欲的に食事を楽しむようになります。五感(資格・聴覚・触覚・嗅覚・味覚)を通じた体験をすることで、食文化や生活についての生きる力を育みます。
③異年齢の子どもと関わる効果
きょうだいの人数が少ない今日では、集団の中で様々な年齢の子どもとの関わりや、小さい子どもへのかかわりは、重要な経験となっています。保育の中できょうだいの関係を体験し、学ぶことが期待されます。
④自分とは異なる文化や存在を理解する効果
地域によっては、外国籍の子どもが多数いたり、様々な国や地域の人とかかわる機会が多くある場合があります。また、障害のある友だちや、ひとり親家庭、異なる宗教や文化を持つ友達や人とかかわりも多くあります。さまざまな人や文化と関わる体験を通して、異なる文化や存在を理解することのできる感覚を育みます。

・保育における「児童文化」の効果

子どもの遊びや生活の中で1) 保育者から提示されるもの(お話、絵本、紙芝居、遊び、手遊びなど)、2) 子ども自ら作り、見だしていくもの(子どもが主体的に関わるもの、伝えるもの、名のない遊びなど)、3) 子どもと保育者と相互のやりとりでつくられるもの(子どもの活動、遊びとそれをさらに機能するための援助など)がある。保育においては、たとえ、人形劇や絵本など、「観る」ものであっても、観る行為だけにとどまらず、その後どのように遊びや活動につなげるか、また子どもの表現や人間関係を豊かなものにしていくかどうかという配慮がなければ、保育の中に位置づいているとは言えない。また、生活の中にみられる「児童文化」の効果は、子どもの保育には「生活」という視点が重要な意味をもつ。したがって、

いくつかの生活の中にちりばめられている。あるいは生活の前提となっている子どもの文化的視点が保育の中で意識される必要がある。相互にかかわることの自由がどこかに保障され、生活や遊びの中で再現したり自由に表現したり、つくり変えたりできることも求められる。子どもが興味・関心をもったものについて疑問をもったり、考えたりしながら、理解を深めていく過程を大切にできるような配慮が求められる。

(6) 学生の模擬保育から考える「言葉かけ」

学生が授業中に「おもちゃ」を製作し、〈子どもたちが絶対作ってみたい〉と思うような模擬保育をした。その中で、特に学生たちの評価が高かった事例をとりあげ、「言葉」の豊かさ、大切さを考えたいと思った。トイレットペーパーの芯、紙コップ、ビニール袋、輪ゴム、折り紙、これだけで空高く飛ぶおもちゃを簡単に作ることができる。Aさんは、アンパンマンを題材にした。

事例1 紙コップロケットを作ってみなで飛ばそう。

「昨日の夜、お月様見た？きれいなお月様だったね。そしてなんと今夜が満月と言って、まんまるいお月さまがでるんです。」「外国ではストロベリームーンなんて言うんだって。ちょっとおいしそうだね。だから先生は、今日の満月をすごく楽しみにしていました。そのうえ、この前大好きなアンパンマンと仲間たちでお月さま(それも満月)に行くお話読んだものね。でも残念、今日は雨です。お月様見えないよね。梅雨って言うね。前にお話したね。残念だけどお部屋の中で、自分たちで作ったロケットをお月様まで飛ばして遊ぼうと思います。」「ジャーン」と言って、アンパンマンロケットをみんなに見せる。

「誰でしょ？ほかの仲間たちのことも知っている？」と尋ねる。そこから、アンパンマンの手遊びをみんなでする。そして、ビニール袋を大きく8の字に回して、空気を入れ「いっぱい栄養注入完了」と言った。「さあ今からアンパンマンをお

空のお月様まで飛ばすよ。飛ぶかな。3. 2. 1って先生言うからみんなは『アンパンチ』と言ってね。』飛ばすがうまく飛ばなかった。すると、「先生は、うまくお月様まで飛ばなかったけど、みんなは飛ぶの作れるかなあ。一緒に作ってみましょう」と結んだ。事例1では、学生を前にしたので思うような反応が返ってこない中、一所懸命頑張っていた。また、アンパンマンコップロケットも、ていねいで美しい製作だった。

学生の感想

- ・お月様の事をよく調べていて、わかりやすい話し方で、お話に吸い込まれていった。
- ・「先生が楽しみにしていた」とか「先生の大好きなアンパンマン」と子どもたちも興味ももてる言い方である。
- ・みんなのよく知っているアンパンマンの手遊びを入れ、より興味をもたせようとしていた。
- ・雨がよく降ることを「梅雨」と季節のこともお話していた。
- ・ロケットを飛ばすかけ声も「3. 2. 1、アンパンチ！」と一体感がもてるようにしていた。

このように学生は、豊富な言葉かけは、子どもが興味を持ち、理解を深め、もっと楽しもうと思える必要不可欠であると考えている。豊かな言葉を発するには、自身の体験や学びの深さの必要性を認識してほしい。

3. 「幼稚園教育要領」の領域「言葉」の捉え⁵⁾

(1) 【経験したことや考えたことを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。】

①領域「言葉」のねらい

- ・自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- ・人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- ・日常生活に必要な言葉が分かるようになると

もに、絵本や物語に親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心通わせる。

②領域「言葉」の内容

- ・先生や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり、話したりする。
- ・したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。
- ・したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。
- ・人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。
- ・生活の中で必要な言葉が分かり、使う。
- ・親しみをもって、日常の挨拶をする。
- ・生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。
- ・いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
- ・絵本や物語に親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。
- ・日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。

領域「言葉」は、自分の思ったことや感じたことを相手に伝える楽しさを味わったり、他の幼児や保育者の言葉や話をよく聞き、伝え合う喜びを感じたり、さらに日常生活に必要な言葉を育てていくことが重要だと考えている。

「幼稚園教育要領」の領域「言葉」内容では、自分の思いや考えを言葉にし、相手に分かるように話したり、相手の話を聞き、その気持ちを思いやったりする。また、日常生活の中で挨拶や楽しい経験を重ねることや絵本や物語など児童文化財に触れることで、さらにイメージや言葉を豊かにしていくと表現している。

(2) 他領域との関わり

幼稚園の一日の生活は、生活習慣を学んだり、自発的活動として十分な遊びを行う。幼児は、保育者や他の幼児と関わりながら、様々な体験を重ね、心身の発達に必要な力を身に付けていく。

「言葉」の獲得においても、幼稚園の生活の中で「遊び・言葉を交わし、色々考え、保育者や友達と心を通わせる」となれば、「言葉」のみで育ま

れるのではないと考える。

5つの領域（心身の健康に関する領域「健康」・人とかかわりに関する領域「人間関係」・身近な環境との関りに関する「環境」・言葉の獲得に関する領域「言葉」・感性と表現に関する領域「表現」）がお互いに関係を持ち、つながり、言葉を育てると考える。

(3) 現役保育者の「言葉」に対する思いを知る

現役保育者（15名）に、「幼稚園教育要領」の領域「言葉」にある【経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う】を踏まえて、就学前施設での現状を聞き取りをした結果である。

①最近の子どもたちの言葉に対する実態で気になることはあるか。

- ・朝の挨拶など基本的な言葉が言いにくい幼児が多い。目上に対する言葉など場や相手に応じた言葉を使う事が難しい。それに対して保護者もあまり意識していない実態も感じられる。
- ・語彙数の少なさ、身近な物の名前を知らない子供が多い。（家庭で正しい名称を耳にする機会が減っているのか）
- ・家庭での読み聞かせの減少
- ・けがをした時、嬉しい時、困った時、「やばい」の一言で伝える子どもが増えた。
- ・困った時など、どう伝えていいのか分からず、黙り込んでしまう。
- ・「無理」「嫌」など短い言葉で返答する。コミュニケーションが絶たれてしまうので、会話が成り立たない。温かい気持ちの言葉のやり取りができる環境が大切だと感じる。
- ・つくしを見つけたときなど「これつくしだよ」と伝えると「YouTubeで見た」という答えが今は多く返ってくる。時代を受け止めながらも教育の場では、絵本をいれたい。
- ・ごっこ遊びの間違った言葉の使い方
例「ご注文の方は～ですね」など大人が間違っているため。
- ・聞く力、聞いて理解する力、聞こうとする態度、

意識が低い。さらに姿勢保持も難しいように思う。

- ・ひらがなの読み書きはできるが、友達とのコミュニケーションは取りにくい。集団生活の指示の聞き取りや理解ができにくい。
- ・構音機能の発達の影響があるのか、はっきりと発音しにくい子(言葉が不明瞭)が多い。赤ちゃんの頃、思いっきり泣いたり笑ったり、しっかりおっぱいを吸ったりができていたのかと思う。
- ・自分の気持ちを伝える言葉を知らない子が多い。

②日頃大切だと思われることは何か

- ・保育者や友達に気軽に思いを伝えられるようになってほしい。「話したい」と思う出来事があること「聞いてほしい」と思うような相手がいること「話してよかった」と思えるような経験ができることを保育者は意識している。
- ・保育者自身が豊かに心を動かしながら遊んだり、生活する中、感じたことや考えたことを言葉にし、子どもたちに伝えていきたい。正しい発音、美しい日本語を意識している。
- ・「ありがとう」「ごめんね」としっかり伝えることを伝える。
- ・子どもが聞いてもらう心地よさや相手に伝わる喜びを味わい、伝えあう楽しさや面白さを実感できるように、良い聴き手でありたいと思っている。
- ・気持ちのコントロールが難しい子どもが多く、簡単に身近な言葉の意味が分かるように短く繰り返し、やり取りがある絵本の読み聞かせやごっこ遊びを意識している。
- ・保育者がしゃべりすぎない。自分から伝えることが苦手な乳幼児には、言葉を補ったり、代弁したりしながらも、気持ちを十分に受け止めることで、子どもは安心し、その積み重ねの体験を大事にしている。

現役保育者の思いを聞くことができた。今の社会状況の変化を受け止めながらも、「生きる力」を育んでいかなければいけないという強い思いを感じた。保育者はその基本に「言葉」の大切さを

おき、子どもに寄り添いながら、自ら心躍るような生活や遊びを経験すること、さらに保護者の学びも支援することが求められるとわかった。

4. 地域の子育て支援施設

(1) K市子育てプラザの成り立ち

1989年、兵庫県教育委員会が「ひょうご両親教育検討委員会」を設立し、少子化・核家族化・都市化・過疎化等による家庭や地域の教育力の低下を懸念し、全国に先駆けて「子育て学習センター事業」を開始すると決定した。各市町教育委員会に120時間の養成講座を修了した「両親教育インストラクター」を順次配置し、様々な事業を行っていく中で、親が孤立感を持つことなく子育てを学びながら親子で成長していくことを目指した。

筆者は1992年からK市に配置され、当時は子育て相談と子育て学習講座を主な業務とした。子育て相談の実体験を事例2に示した。

事例2 8か月の子どもの母親である。うちの子はもうすぐ9か月になるのに「いない、いないばあ」をしない。本には8か月頃には「いない、いないばあを喜んでするようになる」と書いてあるが、全くしない。障害をもっているのだろうか。

相談者である母親の話聞いていくうちに、今までずっと本の通りに子育てした。しかし、事例2のように初めて本の通りにいかなかった。

彼女は当時K市では珍しい高層マンションに住み、夫が仕事に出かけると、ずっと赤ちゃんを二人きりで過ごしていた。一所懸命子育てを頑張っている様子であった。

筆者が「お母さん、どうやって『いないいないばあ』で遊んでやってる？どんな風に教えてやってるの？」と尋ねると、しばらく沈黙の後、「教えてやらないといけないのですか？」と言った。何も教えてやらなくても、8か月になると急に「いないいないばあ」をすと思うっていた。「だって、3か月で首が座り、4か月で寝返りし、5か月で

下の歯が生えてきて、6ヶ月で座らせると座った。どれも私が何も教えずに本本の通りできたもの」と話した。

このようなことがあり、筆者は子育て相談だけでは、親は学べないし、親子関係も育っていかない。「育ち合い」が重要と考え、子育てサークルをつくっていった。先出の母親も本だけでなく、同じような年齢の子どもやその親と一緒に過ごす、こんな悩みを持つことはなかったはずである。次第に母親たちは子どもの成長は、個人差、性差、経験差等があると理解し、ママ友ができ、孤立感を感じるものが少なくなった。子育てサークルは激増していった。1992年2サークル親子60人でスタートし、10年間で20倍以上の42サークル、30倍以上の2000人となった。みんな居場所が欲しかったのだろう。「K市子育て学習センター」は両親の子育て学習を核に、子育て相談、講座開催、子育てサークルの育成、情報提供と総合的な活動を展開していった。

1999年より、市町独自事業になると同時にK市では、「子育て相談センター」と改称し、所管が教育委員会生涯学習推進室から児童福祉課に変わり、新設された子育てホットラインと合体し、臨床心理士も駐在するようになった。

当時の国の少子化対策事業と呼応したことで、より認知されるようになった。

1994年から2003年までの10年間の国の少子化対策の流れ

1990年1.57ショックと言われた国の合計特殊出生率の低下が顕著になった。その後も回復するどころか、激減していった。

1994年エンゼルプラン

1999年少子化対策基本方針

具体的実施計画として新エンゼルプラン

2002年少子化対策プラスワン

従来「子育てと仕事の両立支援策」「保育に関する施設」が中心だったが、子育て家庭の視点から見た場合にはより全体として均衡の取れた取り組みを着実に進めていくことが必要である

という基本的考え方に立っている。そして、「子育てと仕事の両立支援」に加え、「男性を含めた働き方の見直し」「地域における子育て支援」「社会保障における次世代支援」「子どもの社会性の向上や自立の促進」—4つの柱に沿って、社会全体が一体となって総合的な取り組みを進めることとされた。

2003年次世代育成支援対策推進法

2004年K市中心市街地であるJR駅前のビル5階に子育てプラザがオープンした。

2007年K市が副都心と位置付けているJR駅北に2か所目となる子育てプラザがオープン（2022年移転）した。

2009年筆者が前年に設立したNPO法人子育てサポート☆きらりingがK市より2か所の事業委託を受けて現在に至っている。

子育てプラザの開館時間は9時から17時で、土・日・祝も開館している。年末年始6日間のみ休館の体制で基本的に「いつでも、誰でも来館できる場」となっている。年間来館者数約15万人である。

(2) 子育てプラザの事業内容

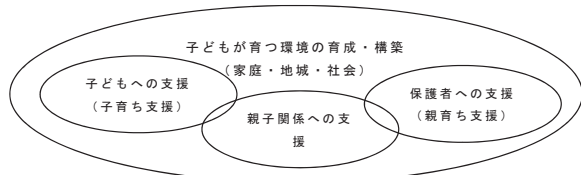
- ①子育て教室開催事業
- ②子育て自主サークル育成・指導・支援事業
- ③子育てに関するイベント事業
- ④今後を担う子育てに関するスタッフ、ボランティアの育成と活動を支援する事業
- ⑤次世代の親育て事業
- ⑥子育て情報提供及び子育て相談事業
- ⑦託児サービス事業
- ⑧潜在保育士就業支援講座事業

・「H27内閣府子ども・若者白書子どもの就学前教育・保育の割合」⁶⁾

年齢	自宅	保育所	幼稚園
0歳	94.9%	5.1%	
1歳	67.0%	29.9%	
2歳	59.7%	32.0%	
3歳	35.6%	42.6%	16.8%

0歳は約95%、0・1・2歳の平均は約70%が在宅で、主に母親と二人きりで一日を過ごしていることがわかる。K市の状況も類似している。集団生活に入るまでに、うまく親子関係がもてるような支援が必要である。

<子育て支援の視点・対象>⁷⁾



・子育てサークルの活動

集まってきた保護者が活動日には何をしたいか。どこへ行きたいか、子どもとどんなことをして遊びたいか、子どもに何を学んでほしいかなどを話し合うことから出発する。そして必ず役割を分担しているところも特徴的である。絵本を読む係、手遊びをする係、おもちゃの製作を担当する係、運動会ごっここの進行係、「工場見学に行こう」となると、行先の工場との打ち合わせをする係などがあり、その役割を果たして子育てサークルは成り立っている。「私、元保育士でピアノが弾けるから弾いてみる」と自ら手をあげる保育経験者も多い。

このように「児童文化」を使いながら、子どもの育ち、親の育ち、親子関係の育ちを育んでいく。そこでは必ず「言葉」が関わる。いくら上手に手遊びが出来ても、その言葉使いや、よくわかる言葉、温かい気持ちになる言葉、元気の出る言葉もセットでなくてはならない。子どもの気持ち

を言葉にしてやることによって子どもは言葉を覚えるだけでなく、自分の気持ちがわかってもらえたことで自己肯定感を育てていくことができる。

(3) 子育てプラザでの保護者の現状

- ①子どもの育て方がよくわからないため、必要以上に心配したり、あきらめてしまったりと両極端が増えた。
- ②みんなで一緒に楽しく過ごしたい思いやその重要性は認識しているが、自由に好きなように時間を過ごすことは大好きだが、子育て学習講座などには参加しない。
- ③子育て情報（特にSNSなど）ばかり多く取り入れ、間違った情報を鵜呑みにしたり、自分の子育てに不安が多い。また、子どもを広場で一人で遊ばせ、時々「ダメ!」「あぶない」「アカン」の単語で叱りながら自分はスマホばかり見ている。
- ④語彙が少ない。喜怒哀楽の感情表現が乏しい。筆者の見かけた母親は、親子三人で順番を待っていた。母親が先頭で子ども二人がそれに続いていた。すると、子ども二人がゴソゴソしだして、声を出したりしていた。すると母親は振り返り一言「ウザイ!!」と。子ども二人はさっとやめ、また前を向いて順番を待っていた。この母親は周りに迷惑をかけてはいけなさとちゃんとわかっていた。子どもはいつも「ウザイ」と言われると、してはいけないことだとちゃんとわかっているからやめた。しかし、母親が子どもに考えさせる言葉かけができていない。子どもに寄り添った気持ちの伝わる言い方はできないのか。このような保護者の態度は、子どもの育ちに顕著にあらわれる。学生は子育てプラザのスタッフの言葉かけや寄り添う様子、子どもとの手遊びや絵本の読み聞かせを一緒に経験することや、他の親子の様子などを見ることから少しずつ学んでいけると思う。

(4) 学生の実践「わくわく子育てカレッジ」

23年間継続している重要な講座とらえている。

- ・対象：高校生・大学生（例年50名程度登録）
- ・期間：8月から翌年2月の休日6回
- ・講座内容

①子育て力をつけよう

子育てプラザスタッフが講話とともに、簡単おもちゃ作りを指導し、次回講座までに子どもと遊んでくるとの宿題がある。

②にっここサマーフェスタに参加

高校生・大学生、子どもと保護者、OBサークル、シニアボランティアの多世代が参加する夏祭りを企画・運営、進行する。出し物のゲームや紙で作った魚釣り、バルーンアート、

人形劇広場など様々な「児童文化」を駆使して子どもたちを楽しませる。

③託児体験

10月と2月の2回実施する。親から離れた子どもと2時間を過ごす。おもちゃを替えたり、一緒に遊んだりする。なかなか泣きやまない子どもに悪戦苦闘する学生も多い。迎えに来た保護者に預かっていた2時間の子どもの様子を話す。

- ##### ④ハロウィンパーティやクリスマス会を運営する。
- 手遊びや親子ふれあい遊び、絵本の読み聞かせやパネルシアターをする。サンタさんなどのグッズを製作する。



にっここサマーフェスタ



わくわく子育てカレッジ



わくわく子育てカレッジ

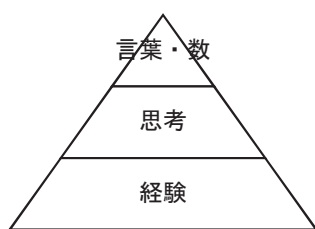


わくわく子育てカレッジ

5. まとめ

(1) 子どもと言葉⁸⁾

子どもの様々な力がどう育ってくるかという、感動したり、おもしろがったり、ほしがったりなど身体をいっぱい使った「経験」という土台がいっぱいあって、その上に一生懸命に工夫したり、考えるという「思考」の世界があって、さらにその上に表現する手段である「言葉」や「数」が出てくる。この構造はピラミッド形になっていないといけない。逆転してしまうと言葉だけは知っている、ちょっとした計算はできる、けれども経験に裏づけられていないから深い思考ができないということになる。



また、汐見稔幸は(2003)「大人は子どもの気持ちの代弁者になろう」と言っている。子どもはこんな気持ちでいるのだらうという気持ちを言葉にする。くやしいと思っているなと思えば「くやしいね」「次がんばろう」と言う。積み木を高く積んだのを見て「こんな高いの、よくできたね」など共感して言葉を添える。すると子どもは、見てくれていると自信を持ち世界を広げていく。また親子の会話だけでは、指示・命令・質問になりやすいので、絵本を読むことを進めている。絵本を読むことで、子どもの中に言葉により豊かなイメージ世界がつくり出され、それを保護者と共有する。その時に膝にのせてもらいながら、背中をトントンしてもらいながら絵本を読んでもらうことは、それ自体が心に残っていく。

(2) 学生に送るエール

子どもが豊かな言葉を身につけて育っていく重要性を考えてきたが、保育者を目指す学生に考えてもらいたいこと、実践してほしいことを記して締め括りたいと思う。

まず、語彙力を高めること、そして自分自身が児童文化財を楽しみながら、子どもたちの望ましい発達にとっての遊びの内容や技術について考え、豊かな言葉表現をすることで子どもたちは、自分の中でしっかり消化でき成長していけると思う。

学生が前記表2表3から「今の子どもたちから見る遊びの偏りを知り保護者に外遊びや集団遊びの大切さを伝えると同時に、だからこそ保育施設では積極的に取り入れなければ」と考えていた。

しかし、そうしたことの保護者への伝え方はむずかしい。保護者は自分のしていることが正解ではないとわかっていても、例えば「子どものよい発達のために夜8時までに寝かせましょう」と言われても、朝7時から夜7時まで子どもを保育所に預けて働いている母親にとってはむずかしいことである。言葉の使い方を学ぶとか、うまく言葉を選べば納得してもらえるとというものでもない。現在の社会状況や子ども・保護者の置かれている立場を理解するとともに、日頃からコミュニケーションを取っていたり、保育者の一所懸命な態度はリスクマネジメントでもある。

下記は子育てプラザの潜在保育士就業支援講座での一部である。言葉の使い方として参考になる。

(3) 保護者と関係を悪くするNGワード

- ① そんなはずないのですが…。
- ② 絶対、普通は…。
- ③ 何故? どうして?
- ④ 何故〇〇できないのですか?
- ⑤ 愛情不足です

K市子育てプラザの事業に学生が参加することは、生の子ども、保護者の反応を見ることができ。予期せぬこともあり、あせったりもするが子どもの喜々とした反応を見て「やっぱり絶対保育士になる」と意欲をかきたてられたりする。

授業中の模擬保育では「正確にはできていた」という程度の評価であった学生が、子育てプラザの親子の前に立つとアドリブで答えていたり、一

人ひとりの顔を見て「おはようございます」と、しっかり挨拶をしたり、「私は今日みんなに会えてとても嬉しいです」と自分の感情も言葉にして伝えることができていた。

また、母親は学生が来ると何とか成功させてやりたいという思いが湧き上がるらしい。子どもの耳元で「おもしろいね」「大きくてびっくりだね」と子どもの気持ちをどんどん言葉にして、子どもが喜ぶ様子に学生を安心させようとする。また学生の子育て中の気持ちに対する質問にも自分の気持ちをわかってほしいという思いと、自分の気持ちを伝えることでよい保育者・母親になってほしいとの思いが強い。

学生は、実習や授業と違って誰にも評価されないが、生の親子とのふれあい体験は絶対必要である。学生には積極的に参加してほしいと思う。

最後に、筆者は地元小学校で読み聞かせボランティアをしている。そして低学年の時は必ず手遊びも入れている。

つい先日2年生のクラスで「大きくなったら何になる？」の手遊びの後、「大きくなるっていうことは」という本を読んだ。すると「あっ思い出した。こども園の時、〇〇先生に読んでもらったやつや」とか「やったあ、私も思い出せてうれしい」とかの声が出た。幼児期のことが今もしっかり思い出として残っているのだとわかる。

「児童文化」は、「A先生のするアンパンマンがおもしろい」とか「A先生の読んでくれる絵本が好き」など児童文化財の楽しさプラス保育者の名前がつくことがある。A先生が上手に遊びを教えてくれたことは間違いないが、A先生が子どもたちを引きつけるパワーや魅力もあったのだろう。そして何より、子どもたちと普段の生活の中で一緒に楽しみたいという思いが強いからこそだと思う。素敵保育者になってほしい。

〈引用文献〉

- 1) 文部科学省「幼稚園教育要領」幼児期の終わるまでに育てほしい姿 2017年3月 PP.54-73
- 2) 文部科学省「幼稚園教育要領解説」2018年3

月 PP.225-227

- 3) 児童文化がひらく豊かな保育実践 中坪央典 編著 2015年4月 PP.23-24
- 4) 前掲書 PP.78-79
- 5) 文部科学省「幼稚園教育要領解説」領域「言葉」 PP.213-224
- 6) 内閣府平成27年度 子ども・若者白書 就学前教育・保育の割合 第1-3-2図より 2015年
- 7) 子育て支援の視点・対象(福祉士養成講座編集委員会編「児童福祉論 第4版」2007年 P.55
- 8) 0～5歳 素敵な子育てしてみませんか。 汐見稔幸著 2003年5月 P.14、78、79

〈参考文献〉

「ひょうごの子育て支援策と子育て学習」神戸親和女子大学児童教育学研究 勝木洋子著 2012年 PP.13-27